

[特別活動]

中学校における自治的能力の育成と学校生活の 活性化に関する研究

— 小学校からの積み重ねや経験を生かした「クラス会議」の継続的実践を通して —

高橋 淳一*

1 はじめに

平成29年3月に告示された中学校学習指導要領において、学級活動の内容の(1)学級や学校における生活づくりへの参画の指導について、「集団として意見をまとめる話し合い活動など小学校からの積み重ねや経験を生かし、それらを発展させることができるように工夫すること」と示された¹⁾。また、中学校指導要領解説の特別活動編では、「中学校においては、話し合い活動における学校間、教師間の取組に差が見られ、話し合い活動に対する十分な理解の下に実践が行われてきたとは言いがたい状況が見られる。(中略)これからの時代を生きる力として、個々の生徒に社会参画に対する意識の高揚を図り、合意形成に関わる自治的な能力を育むことが、これまで以上に求められている」と指摘されている²⁾。以上のことから、中学校学習指導要領では、小学校からの連続性を持った話し合い活動の充実が求められていると言える。しかし、山田ら(2020)が、「小学校における話し合い活動の実践報告や学術研究は数多く公開されているのに対し、中学校における話し合い活動については、実践報告は僅かであり、学術研究は皆無という現状である」と指摘している³⁾ように、筆者が勤務する学校、学年でも話し合い活動はほとんど見られず、生徒総会の議案審議や体育祭、合唱コンクールにおける話し合いなど、散発的な活動にとどまっていた。

では、中学校での話し合い活動を浸透させていくためには、どのような課題があるのだろうか。中学校指導要領解説の特別活動編では、前述した指摘に加え、話し合い活動を指導する際の注意点として、「中学生の時期には、一般的に、他人の目が気になったり、自分の意見を主張することを躊躇ったりしがちである。考えの違いから摩擦が起きることを避けようと当たり障りのない発言をしたり、どうせ何も変わらないという意識をもっていたりもする」と、思春期特有の課題を挙げている⁴⁾。また、前述した山田らは、「話し合い活動が中学生の成長と発達に、さらに中学校生活の活性化にどのような効果があるのかを実証的に明らかにするような研究が待たれる」と述べている⁵⁾。以上のことから、中学校における話し合い活動が、合意形成に関わる自治的な能力の育成や、中学校生活の活性化にどのような影響を与えるかを明らかにする必要があると考えた。

2 研究の目的

中学校における、小学校からの積み重ねや経験を生かした話し合い活動が、合意形成に関わる自治的な能力(ソーシャルスキル)の育成に有効であるかを検証する。また、話し合い活動での経験が、学校生活の活性化にどのような効果があるのかを明らかにする。

3 研究の方法

(1) 研究期間 令和2年4月～令和4年7月

(2) 評価方法 ・hyper Q-Uにおける学級生活満足度尺度、学校生活意欲尺度、ソーシャルスキル尺度

・クラス会議の様子を記録したフィールドノート ・筆者作成のクラス会議に関するアンケート

効果の評価方法については、対象生徒たちは小学校でも小学校版のQ-U(河村, 1998)⁶⁾を実施しており、学級生活満足度や学校生活意欲について比較が可能であることに加え、「配慮」と「かかわり」からなるソーシャルスキル尺度により、合意形成に関わる自治的な能力の変容が測定できると考え、hyper Q-U(河村, 1999)⁷⁾を採用することとした。また、積極的な自己主張や摩擦を恐れない建設的な発言など、数値には表れない主体的な言動を明らかにするため、筆

*上越市立安塚中学校

者によるクラス会議のフィールドノーツを採用する。また、生徒がクラス会議で培った力が、学校生活の活性化にどのように活かされているかを明らかにするため、記述式のアンケートも採用することとした。

(3) 調査対象 令和2年度入学生15名

本研究の対象となる生徒は、男子3名、女子12名の計15名の学級である。中学校区に小学校は1校であり、保育園から義務教育の12年間を同じメンバーで過ごしている。そのため、互いのことをよく理解している反面、人間関係や学級内での役割が固定化しており、新たな人間関係の構築やリーダー職への立候補などへの意欲が低いことが、勤務校における学校課題の1つであった。また、入学当初に行ったhyper Q-Uの学級満足度尺度の結果は、学級生活満足群が67% (10人)、非承認群が27% (4人)、侵害行為認知群が0% (0人)、学級生活不満足群が7% (1人)だった。学校生活意欲尺度は全国平均と同じく77.5ポイント。ソーシャルスキル尺度では、「配慮」のスキルの数値が全国平均値を上回り、中学校に入学した当初から受容的な雰囲気の中で学校生活をスタートすることができていた。その一方で、「かわり」のスキルの数値が全国平均値とほぼ同水準であり、周囲に受容的な仲間が多いこともあり、自己主張に消極的な、受け身の姿勢の生徒が一定数存在している。そのような受け身の姿勢は学校行事や生徒会活動にも現れており、一部の積極的な生徒の発言・発表に続く生徒が出てこず、意見を問われても自分の考えを上手く発表できなかつたり、聞き取りやすい声量や顔を上げての発言ができなかつたりする生徒もいる。同様の様子は各教科の授業でも散見され、一方的な意見交換に終始し、対話的な学びが実現できていないと言いがたい状況であった。

(4) 具体的方策

途中編入の男子生徒1名を除く15名は、小学校1年生から赤坂(2014)の提案する「アドラー心理学に基づくクラス会議プログラム⁸⁾」(表1)を継続して実践してきている。そこで、小学校からの積み重ね、経験を生かすため、中学校でもクラス会議プログラムを取り入れた話し合い活動を採用した。

調査期間中に合計20回のクラス会議を実践した(表2)。議題の提案者は第12回と第20回(生徒)、第18回(教育実習生)を除いては学級担任であり、話し合いの単位は第11回(全校生徒)と第14回(1・2年生合同)を除いては調査対象学級で行った。

表1 クラス会議プログラムの流れ

- ① 輪になって座る
- ② 話し合いの決まりの確認
- ③ いい気分・感謝・ほめ言葉
- ④ 前回の解決策の振り返り
- ⑤ 議題の提案
- ⑥ ペアによる解決策の検討
- ⑦ 解決策の発表
- ⑧ 質問・意見を出し合う
- ⑨ 解決策の決定(多数決)

表2 令和2年度～令和4年度のクラス会議実施日と議題

回数	実施年月日	議題	回数	実施年月日	議題
1	R2.5.22	学級目標を考えよう	11	R3.6.18	全校生徒が時間通りに朝読書始めるには
2	R2.5.29	学級目標の掲示物をどう作るか	12	R3.7.13	クラスの発言を多くするには
3	R2.7.3	クラス全員が毎日自学を提出するには	13	R3.11.26	学級レクを企画しよう
4	R2.10.2	給食の台拭き忘れへの対策	14	R4.2.3	三年生を送る会を企画しよう
5	R2.11.6	クラス全員がテスト勉強30時間を突破するには	15	R4.4.15	3年目の学級目標を考えよう①
6	R3.3.19	学級目標の達成度を評価しよう	16	R4.4.22	3年目の学級目標を考えよう②
7	R3.4.15	2年目の学級目標を考えよう	17	R4.4.26	学級目標の掲示物をどう作るか
8	R3.4.23	学級目標の掲示物をどう作るか①	18	R4.5.19	教育実習生の悩みに答える
9	R3.4.30	学級目標の掲示物をどう作るか②	19	R4.6.20	クラス・個人の今の課題を考える
10	R3.5.17	学級目標発表会でどんな発表をするか	20	R4.6.27	家庭学習のやる気を出すには

4 結果と考察

(1) hyper Q-U

① 学級生活満足度の結果

表3は、入学後の1年生の春から3年生の春までの計5回のhyper Q-Uの承認得点と被侵害得点の平均値の推移を表したものである。表3からは、学年があがるにつれ承認得点が上昇し、被侵害得点も微増していることが認められたため、中野(2014)の「js-STAR」を用いて分散分析を行ったところ、承認得点と被侵害得点ともに有意差は認められ

なかった⁹⁾。そこで、承認得点の合計平均値を押し上げている下位項目を明らかにするために、下位項目すべてに分散分析を行った結果、3つの下位項目で有意差や有意傾向が認められた。(表4)。

表3 承認得点と被害得点の平均値の推移

	1年春	1年秋	2年春	2年秋	3年春
承認得点	35.2	37.3	37.9	37.7	38.4
被害得点	14.7	14.0	14.3	15.3	16.1

表4 承認得点の下位項目のうち、有意差や有意傾向が認められた項目

質問項目	1年春	3年春	増減	F比
4 みんなから注目されるような活躍をしたことがある。	3.27	4.27	+1.0	9.55**
5 自分の考えがクラスや部全員の意見になることがある。	2.93	3.60	+0.67	8.74*
8 仲のよいグループでは、中心的なメンバーである。	2.67	3.13	+0.46	3.33+

+p<.10 *p<.05 **p<.0.1

「4 みんなから注目されるような活躍をしたことがある」を大きく上昇させた要因として考えられるのは、クラス会議プログラムの③「いい気分・感謝・ほめ言葉」の活動であると推察される。この活動は、ペアの頑張りやしてくれたことへの感謝、ペアの良いところを伝え合う活動である。他者から見た自分の長所を言葉にして伝えられることで、自分の活躍を客観的に評価できるようになり、自分の活躍への自信を深めた可能性があるのではないだろうか。「5 自分の考えがクラスや部全員の意見になることがある」の上昇は、合意形成を図るための話し合いの中で、賛成意見や反対意見を全員が述べ、それらを参考にした上で多数決が図られるという、全員参加を原則とするクラス会議のプロセスに起因するものと推察される。自分の意見がそのまま解決策になることはなくとも、自分の意見を参考にして話し合いが進展したり、解決策の一部として取り入れられたりした経験が、話し合いへの貢献を実感させたのではないだろうか。「8 仲の良いグループでは、中心的なメンバーである」の上昇は、ペアや小グループでの話し合い活動の経験を積む中で、自分の意見を主張することへのためらいが少なくなっているためではないかと推察される。その経験が、日常生活においても発揮され、グループでの合意形成に主体的に参画でき、その結果が数値として表れた可能性がある。

② 学校生活意欲尺度の結果

表5は、学校生活意欲尺度の総合得点と下位項目の平均値の推移、全国平均値を示したものである。表5からは、総合得点の上昇と、下位項目の教師との関係、進路意識の上昇が認められた。その一方で、友人との関係、学習意欲、学級との関係はほぼ横ばいで、大きな変化は認められなかった。総合得点およびすべての項目において、分散分析を行った結果、どの項目においても有意差は認められなかった。学級生活満足度尺度と同様に、それぞれの下位項目の質問項目すべてについて分散分析を行った結果、2つの下位項目で有意傾向が認められた(表6)。変化の少なかった項目のうち、「友人との関係」と「学級との関係」は、12年間にわたる共同生活と小学校でのクラス会議の実践により、相互理解が十分に深まっていたため、中学校での実践では大きな向上が見られなかったと推察される。上昇が認められた「教師との関係」については、小学校時代に毎年担任の交代を経験してきた生徒たちにとって、初めての持ち上がりの担任でもあるため、年々数値が上昇していったと考えられる。また、「進路意識」の上昇も受験を控えた3年生にかけて上昇することは、ごく自然のことだと考えられる。

表5 学校生活意欲尺度の平均値の推移

	1年(春)	1年(秋)	2年(春)	2年(秋)	3年(春)	全国平均
総合得点	77.5	79.1	80.6	80.5	81.8	77.5
友人との関係	17.8	18.6	18.0	17.8	17.8	17.3
学習意欲	16.1	15.3	15.5	15.6	15.9	15.3
教師との関係	13.4	14.5	15.0	14.6	15.2	14.5
学級との関係	17.2	17.2	17.3	17.3	17.4	15.7
進路意識	13.0	13.5	14.8	15.3	15.5	14.7

表6 学校生活意欲尺度の下位項目のうち、有意傾向が認められた項目

	質問項目	1年春	3年春	増減	F比
進路	17 なりたい職業や興味を持っている職業がある。	3.60	4.20	+0.60	3.50+
	18 自分の将来に夢や希望を持っている。	3.67	4.20	+0.53	4.35+

+p<.10 *p<.0.5 **p<.0.1

③ ソーシャルスキル尺度の結果

表7はソーシャルスキル尺度の「配慮」のスキルと「かかわり」のスキルの平均値の推移を示したものである。表7からは、「配慮」のスキルはほぼ変化が認められなかったものの、「かかわり」のスキルの上昇が認められた。これら2つの項目について分散分析を行った結果、どちらの項目においても有意差は認められなかった。そこで、「配慮」と「かかわり」のスキルの下位項目すべてについて分散分析を行った結果、「12 友人が楽しんでいるときに、盛り上げている。」で有意差が認められ、「13 うれしいときには、身ぶりで気持ちを表している。」で有意傾向が認められた(表8)。これらの項目が上昇した理由として、小学校の時に作成した「クラス会議の決まり」の存在が関係していると考えられる。この決まりは「友達の話をあいづちをうちながらよく聞く」「思いついたことはどんどん発表する」「友達一人一人の考えを大切にすること」の3か条からなり、クラス会議前に全員で音読をして、意識して話し合い活動に取り組むことを継続してきた。その結果、中学校入学後にも他者と関わる場面が量的に多く確保され、「かかわり」のスキルが上昇した可能性があるのではないだろうか。

西村ら(2017)によると、一部の中学生は、学年が上がるにつれて、「配慮」のスキルは高まる一方で、「かかわり」のスキルが低下していくことが明らかにされており、対人関係でのつまずきや不適応感を抱える可能性が推測されている¹⁰⁾。しかし、本実践では「配慮」のスキルは上昇が認められず、「かかわり」のスキルは上昇している。「配慮」のスキルについては、分散分析の結果から、下位項目すべてにおいて平均値+1SDの値が、上限値である4を超えており、天井効果が生じていた。このことから、小学校での継続した話し合い活動が、中学校入学前に「配慮」のスキルを十分に高め、中学校での継続した話し合い活動が「かかわり」のスキルを低下させることなく、さらに上昇させた可能性が示唆された。

表7 ソーシャルスキル尺度の平均値の推移

	1年(春)	1年(秋)	2年(春)	2年(秋)	3年(春)
「配慮」のスキル	33.7	33.1	33.7	33.1	32.9
「かかわり」のスキル	26.9	28.7	28.5	27.5	28.9

表8 「かかわり」のスキルの下位項目のうち、有意差や有意傾向が認められた項目

質問項目	1年春	3年春	増減	F比
12 友人が楽しんでいるときに、盛り上げている。	2.87	3.56	+0.69	10.00**
13 うれしいときは、身ぶりで気持ちを表している。	3.07	3.53	+0.46	3.90+

+p<.10 *p<.0.5 **p<.0.1

(2) クラス会議の様子を記録したフィールドノートより

筆者が記録したクラス会議のフィールドノーツのうち、合意形成に関わる自治的な能力の向上が認められたエピソードを以下に紹介する。

【第20回クラス会議(R4.6.27) 議題:家庭学習のやる気を出すには】

それまで多くのクラス会議の議題提案者が教員であったことから、生徒たちの自治意識を一層向上させるためにも、第19回のクラス会議で話し合いたい議題について考える機会を設定した。出された議題案は大きく分けて、受験や定期テストに向けた学習についてと後輩たちとの関わり方についての2つであった。その中でも、「学校では集中して勉強できるが、家ではやる気がでず、集中して勉強ができない。みんなと家でやる気の出し方を考えたい」という議題案が、多くの生徒の共感を得て、今回の議題に決定した。クラス会議に先立ち、筆者が「今日のクラス会議は、入学してから記念すべき20回目のクラス会議です」と話すと、自然と拍手が沸き起こった。このことから、生徒たちにとってクラス会議が価値あるものとして捉えられ、自分たちの学校生活に欠かせないものになっていることが推察される。各グループからのアイデア発表では、「情報端末を隠す、親に預ける」といった物理的な対策案や「やることリストを作成する」、「帰宅後すぐに決まった時間必ず勉強する」などのタイムマネジメント的な対策案が挙げられた。その後の

話し合いでは、「手の届かないところに置いておけば、早く終わらせようとやる気が出る」という意見に対して、「置いてある場所が分かっていたら、そっちが気になってしまうし、取りに行ってしまうし」、「メディアへの気持ちが勝った状態で学習しても、内容が適当になってしまう」と、間をおかずに正反対の意見が挙げられていた。このような姿は実践初期のころは認められなかった姿であり、建設的な意見の述べ方が身に付いたり、よりよいアイデアにするためには問題点や心配な点を挙げるのが欠かせないという意識が醸成されたりした結果だと推察される。また、「YouTubeを見始めたら、ついつい次の動画、次の動画となってしまって切り替えが難しい」、「自分には30分はハードルが高くて難しそう。20分ならできるかもしれない」など、自分の心の弱さや本音を口にする生徒も多く見られた。そのような自己開示を伴う、本音の発言ができるということは、自由な発言が認められる雰囲気や人間関係が醸成された結果と考えられる。最終的には、「チェックシートなど互いの努力が見えると、みんなで頑張れそう」という意見を受けて、「毎日、帰宅後20分間は勉強する。できた人は翌朝、チェックシートに印をつける」という目標が決定された。

今回のクラス会議では、複数のグループが提案した「手の届かないところに置く」というアイデアに対して、摩擦を恐れずに、その有効性や実現可能性の低さを指摘する発言があり、より良い解決策を求めようと話し合い活動が活性化の様子が認められた。また、「みんなで頑張りたい」という仲間の意見を受け入れ、チェックシートで可視化するという工夫が付け加えられるなど、合意形成に関わる自治的な能力の向上が認められた。加えて、今回のクラス会議には、小学校6年生の時の担任が参観しており、クラス会議終了後に「子どもたちが成長していてびっくりしました。6年生の時には、誰かが意見を言っている最中に発言してしまい、最後まで意見を聞くことができていませんでした。でも今日は、相手の話リアクションを取りながら、最後まできちんと耳を傾けてから発言していました。」と感想を述べていた。これらのことから、継続した話し合い活動が、建設的な発言や仲間の発言に耳を傾けるなどの、合意形成に関わる自治的な能力の育成に有効である可能性が示唆された。

(3) クラス会議に関するアンケート

話し合い活動が、合意形成に関わる自治的な能力の育成や、中学校生活の活性化にどのような影響を与えるかを明らかにするため行ったアンケートのうち、以下の項目についての記述内容をまとめ、分類した。

- ① クラス会議で学んだことや身に付けたことが、学校生活の中で役立っていると感じた場面はどんなときですか。
- ② クラス会議で学んだことや身に付けたことが、授業の中で役立っていると感じた場面はどんなときですか。

【合意形成に関わる自治的な能力に関するもの】

- ・みんなの意見にすぐに拍手が出るようになった。 ・集中して相手の話を聴くことができるようになった。
- ・自分の意見を言えるようになってくるため、少人数での話し合いで自分の意見を言って、解決に導くことができる。
- ・授業以外でも、あいづちを打ったり、目を見て話したりできるようになった。
- ・クラス会議での書記や司会の経験から、班の意見を自然とまとめられるようになった。
- ・仲間のいい意見に気づくことができるようになった。
- ・なかなか意見を言えない人に、発言を促すことができるようになった。
- ・クラス会議では、クラスみんなのことを考えて発言する必要があるの、相手を思いやる行動が身についた。

【生徒会活動や学校行事に関するもの】

- ・自分から発言をするという責任感もてたので、行事でリーダーになってもしっかりとまとめることができた。
- ・委員長として、委員から出てきた意見を様々な視点から考えてまとめることができた。
- ・様々な行事で話し合いが必要になったとき、自然と円形になって話し合いが始まる。
- ・行事のときに周りの人を手伝ったり、自分から行動できるようになったりして、クラス会議の成果だと感じた。

【授業や家庭学習に関するもの】

- ・クラス会議で発言する機会が多かったので、授業でも進んで発言する回数が増えたり、先生に質問をすることも増えたりしました。
- ・数学の授業では「これでも解けるけど、こういう解き方はどうかな」と、自分なりに考え方を広げていけるときに、クラス会議が役立っているなど感じた。
- ・家庭学習についてみんなで話し合っただけで決めたことで、家庭学習にやる気が出たり、継続しやすくなったりした。

生徒の記述からは、合意形成に関わる自治的な能力について、あいづちや拍手などのリアクションなどの、hyper Q-Uのソーシャルスキル尺度の「配慮」のスキルに加え、積極的な発言や周囲への発言の促しなど、「かかわり」のスキルに分類されるものが散見された。このこととソーシャルスキル尺度の考察から、中学校での継続した話し合い活動が、小学校での話し合い活動で培われた「配慮」のスキルを高い水準で維持し、中学校入学時には課題であった積極的な発言などの「かかわり」のスキルを向上させた可能性が高まった。生徒会活動や学校行事に関するものについては、クラス会議で培った責任感や多角的なものの見方を活かして、委員長やリーダーとして活動をまとめている姿が認められた。また、自然発生的に話し合い活動に取り組んだり、自発的に手伝いに取り組んだりしている様子がうかがわれ、フォロワー生徒の主体的な活動への参画の様子も確認された。授業や家庭学習に関するものについては、クラス会議を通じて発言や質問への抵抗感が薄れた結果として、教科学習でも積極的に発言や質問に取り組む姿が確認された。また、解決策をよりよいものにするために賛成意見や心配意見や出し合う経験から、1つの解法に満足することなく、他の解法を検討しようとする向上心が数学の授業でも発揮されている様子が認められた。家庭学習の取り組み方について話し合ったことにより、クラスの課題を自分事として捉え、みんなで決めたことを自分も守ろうとする自治的な意欲・態度も確認され、話し合い活動が学校生活の活性化に有効である可能性が示唆された。

5 成果と課題

小学校からの積み重ねや経験を生かした話し合い活動を、中学校でも2年4か月継続した結果、次のような向上的変容が認められた。

- ・生徒の集団内における自己存在感を高め、摩擦や周囲の目を気にしない積極的、建設的な発言を促す。
- ・小学校時代に培った受容的な態度など、「配慮」のソーシャルスキルを高い水準で維持する。
- ・活動を盛り上げたり、自分の感情を行動で表現したりするなどの「かかわり」のソーシャルスキルを向上させる。
- ・リーダー、フォロワーにかかわらず生徒会活動や学校行事への主体的な参画を促す。
- ・授業への積極的参加や家庭学習の改善に取り組む意欲を高める。

今後の課題としては、本実践が小学校入学前からのまとまりのある集団での実践であったため、より大きな学級、学年集団でも同様の成果が期待できるかの検証が必要である。また、小学校から継続してきたクラス会議プログラムを利用したため、スムーズに話し合い活動をスタートさせることができたが、複数の小学校から進学してくる中学校では、どのような話し合い活動が有効であるのかの検証やプログラムの提案が期待される。

引用文献

- 1) 文部科学省 「中学校学習指導要領（平成29年告示）」
(https://www.mext.go.jp/content/20210113-mxt_kyoiku01-100002608_2.pdf) 閲覧日2022年9月30日
- 2) 文部科学省 「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」
(https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf) 閲覧日2022年9月30日
- 3) 山田真紀 「中学校における学級活動「話し合い活動」の導入に関するアクションリサーチ」『椋山女学院大学教育学部紀要』2020 13 pp.75～83
- 4) 前掲2)
- 5) 前掲3) 74項
- 6) 田上不二夫監修、河村茂雄著 『Q-U楽しい学校生活を送るためのアンケート』 図書文化社 1998
- 7) 河村茂雄著 『hyper Q-Uよりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート』 図書文化社 1999
- 8) 赤坂真二 『赤坂版「クラス会議」完全マニュアル』 ほんの森出版 2014
- 9) 中野博幸 田中敏 『js-STARでかんたん統計データ分析』 技術評論社 2012
- 10) 西村多久磨 福住紀明 藤原和政 河村茂雄 「学校生活満足度に対するソーシャルスキルの予測力」『心理学研究』 日本心理学会 2017 88 pp.162～169